OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	私のバンツー語研究
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 1990, 1, p. 91-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

私のバンツー語研究

梶　茂樹

バンツー系諸語というのは、西はナイジェリアとカメルーンの国境地帯から、東はケニアの海岸地帯、そして南は南アの喜望峰まで、アフリカ大陸の、南西部を除く、ほぼ赤道以南の全域で話されている一連の系統的に関係のある言語群である。かつては、これだけで一つの語族（language family）を構成していると考えられていたが、今日では西アフリカの様々な言語と系統的につながっているとされる。ケニア、タンザニアなど、東アフリカを中心に話されているスワヒリ語はその重要なメンバーであるが、こういった大言語はむしろ例外で、大部分は話し手の数、数万から数十万の小さな言語の集まりである。

このバンツー系諸語は、比較的最近に祖語から分かれたと思われ、話されている地域が広い割には、お互いよく似ている。この事実はすでに、１７世紀、アフリカの沿岸部を航行していたポルトガル人が、インド洋岸のモザンビークと大西洋岸のアンゴラの言語を比べてすでに指摘している。実際、純粋に言語的に見れば、日本語の様々な方言のようなものである。

なお、このバンツー（Bantu）という用語は、バンツー語比較言語学の父、ドイツのブレークが、その著 A Comparative Grammar of the South-African Languages（London, 1862-69）の中で用いたのが最初で、それをきっかけとして広まったのであるが、実は古代エジプトのヒエログラフに、Puntu “黒人の国”というのがあり、ブレークはこれに着想をえ、 Puntu を Buntu とし、さらにそれを Bantu “人々”としたというのが実状らしい。

私は、１９７６年よりアフリカでのフィールド調査を始め、主としてザイール共和国の東部で、土地のスワヒリ語、そしてナンデ語、ブイシャ語、フンデ語、テンボ語、ニャンガ語、レガ語、ハヴ語、シ語、ヴィラ語、ベンベ語などの部族語を調査してきた。

調査していて、最初に最も頭を悩ませたのは、いわゆる声調 tone である。音の高低によって単語の意味が違うし、また時制なども違ってくるのだ。もちろん、

人類学ならば、そんなのは“省略”してしまっていいのであるが、言語学としては、これはどうしても克服しなければならない。

現象自体は、それほど難しいことではない。単位としては、せいぜい高［˗］、低［˳］、中［-］、下降［↘］、上昇［↗］の５つで、あと、高低高／˗˳˗／が［˗˳-］のように実現される downdrift や、［˗˗-］のようになる downstep があるだけだ。日本語でも、音の高さ、いわゆるアクセントがあるので、慣れてはいるはずだが、最初は、なかなか聞いても高いのやら低いのやらわからない。

そんな時、役立ったのがピアノだ。音の高さがわからないのは、それを担う子音、母音（そして強さ、長さ）に気がとられるということもあるが、聴覚には、「見てわかる」という客観的なものがないからだ。だから、それを視覚に移してやればいい。そうすれば、それこそ一目瞭然だ。インフォーマントが鍵盤の右の方を叩けば、高いし、左の方を叩けば、低いということだ。

音の高さの聞き取りの、もう一つの助けになったのは、自分の方言だ。私は香川県の出身だが、香川県方言、とりわけ西讃方言はアクセントの体系が複雑である。昔の細かい区別をいっぱい残しているのだ。大学は京都に行ったが、アクセントは大体において似てはいるが、いくつか違いがある。似ているが故に、かえって違いが目立つというわけだ。たとえば、「石」、「雪」などは香川県方言でも、京都方言でもいずれも［˗˳］と発音するが、「山」、「親」、「耳」などは、京都（そして一般に関西方言）では「山」などと同じく［˗˳］である。香川では［˗˗］である。私には、この［˗˳］という発音はきわめて奇妙に聞こえた。その後、東京へ行ったが、東京ではこれらはすべて［˳˗］となる。

こういった状態は、バンツー語そっくりである。たとえば「男」は、ザイール東部のナンデ語、フンデ語、テンボ語、シ語、レガ語ではそれぞれ、múlúme［˗-］、mulûme［˳↘˳］、múlumé［˗˳-］、múlúmė［˗˗-］、mulúme［˳˗˳］となる（いわゆる augment は省く）。特に、テンボ語とレガ語では隣接言語でありながら、声調は全く逆になっている。その解明が、今一番の関心事であるが、おそらくナンデ語、フンデ語など、中間の言語の分析がその解決の糸口を与えてくれるものと思われる。

こういうわけで、言語の問題を主体に調査を進めていたのであるが、ある日、一つの転機があった。それはテンボの村で調査をしていて、調査がよく進み、夕

方、今日もよくやった、と思ってほっとしていると、それまで私につきあってくれていた人たちが、当然のことながらテンボ語でペチャクチャと話し始めた（私はスワヒリ語で調査をしていた）。こっちとしては、何を言っているのかさっぱりわからない。そのうちに、みんながハハハ…と笑ったりする。もちろん、何かおかしいことがあって笑っているのだろうが、しかし、それはあたかも私のことを笑っているような気がした。「あいつは、あんなにテンボ語のことを細かく一生懸命調査していても、こんな簡単なことさえわからない…」。つい今し方まで、彼らの言語を「理解した」と思っていたのに、本当は何も理解していないのではないか。言いようのない疎外感。その時、これはやはり、彼らのことばを理解しなければならないと思った。

通訳の助けをかりて、あるいはスワヒリ語などの媒介言語を用いての調査は危険だ。もちろん、そうしなければできないこともあるということは十分認めるが、同時に、危険な面をはらんでいるということも常に心にとめておかなければならない。なぜなら、調査というのは、自分が興味があるからやるのであるが、興味を持つということは、すでに対象を自分の興味の方向にまげてしまっている可能性がある。われわれとしては、まず、物事をあるがままに見たい。しかし、質問するということ自体が、すでにバイアスとなってしまっているかもしれないのだ。理想は、質問せず、人々をあるがままに眺めること。それには、最低、言葉ができなければ話にならない。

もちろん完全ではないが、そういう角度で物を眺めた結果、見えてきたのが、〈人の名前〉である。まず驚いたのは、人の名前が全部理解できるということだ。「戦争」、「キャッサバの葉っぱ」、「山アラシ」、「兄弟であること」、「良い友情」、「われわれは彼（女）と一緒に暮らしている」、「父親のある者」、「黙る人」、「私は知らなかった」…。名前と言っても、何も特殊なものはない。名詞あり、形容詞あり、文あり、関係節ありの、ごく普通の言語表現だ。言葉さえわかれば、すぐわかるしろものだ。と言うことは、誰かが子供に名前をつけた場合、その意味は、同じ社会の人間ならば誰にでもわかるということだ。と言うより、むしろ、人がわかることを狙って名前をつけるのではないか。名前がメッセージであることを理解するのはごく自然の成行きであった。

ただし名前はメッセージであるといっても、多くの場合、ことわざに対応して

いるので、そうすんなりと行くものではない。しかし、それは、言語を調査してきた私にはむしろ好都合だと思われた。何も頭を使わずに理解するのはつまらない。かえって、ストレートでない方がおもしろいのだ。

人類学的調査は特にそうだと思うが、それがおもしろい論文であるかどうかは、おもしろいテーマを見つけたかどうかで決まる。おもしろい題材を扱ったものは、やはりおもしろい。そのためには、村で人々が何を話しているかを知るのはきわめて重要なことだ。

言語、とりわけその声調に興味を持ち、人類学的にもおもしろい題材を見つけることを願っていた私としては、伝達用太鼓の研究はひとつの当然の帰結であった。森林地帯のモンゴ族とレガ族のタムタムのメッセージをテキスト化し、訳をつけていく。太鼓は、叩くこと自体は難しくない。また、その内容の表面的な理解も難しいものではない。難しいのは、ことわざ、あるいはことわざ的表現がいっぱいちりばめられている文章の理解である。

一般にアフリカ人、その中でもとりわけバンツー系の人間にとって、人が生きていく上で最も重要なのは“智”である。たとえばテンボ族は、「人の頭の良さが、その人を存在せしめているのだ」とまで言っている。頭が良くなければ、泥棒に物を盗まれるかもしれないし、また邪術者に害を加えられるかも、最悪の場合は殺されるかもしれない。そして、ことわざというのは彼らにとって、生きる指針であると同時に、英知の結晶なのだ。

今まで私が出会った中で一番のことわざ人間はレガ族だ。彼らは、人の名前、仮面などはもちろんのこと、一枚の木の葉にもことわざを託す。たとえば、村の集会所の中に一本の紐が通っているが、その紐には、それこそ、木の葉、石ころ、鶏の羽毛など、様々なガラクタがぶら下がっている。そして、その一つひとつがことわざに対応しているのだ。

これは言語だけの問題ではない。同じ物を見ても、そこに価値を見いだすかどうかだ。調査者の立場も同様。先程の人の名前の場合でも、名前というのは単に人につけられた符号だと思っていれば、それがメッセージになっているとは夢にも思わない。「知恵の紐」の場合でも同様。太鼓言語でもそうだ。実際、トクットクットックという太鼓の音は、森を歩いていると木のそよぎのようであり、気をつけていないと太鼓が叩かれていること自体わからないのだ。